

学習者に「話せる！」という実感を与えるために—初級教育再考—

小山 悟

本稿は、2005年3月11日に国際交流基金バンコグ日本文化センターで開催された日本語教育セミナーでの講義内容を加筆・修正したものである。文法や語彙の知識はあるものの、それをうまく使いこなせないという学習者に「話せる！」という実感を与えるためにはどうすればいいのか。この疑問に答えるために、本稿ではまず顕在的知識と潜在的知識という2つの言語知識の観点から、知識と運用力のギャップを生み出す根本の原因について考える。その上で、項目積み上げ式の初級教育が抱える問題点について言及し、具体的な解決策として(1)「思考の流れを変える」、(2)「何度も繰り返す」、(3)「気付きのプロセスを組み込む」という、『J.Bridge』で採用した3つのアイデアについて紹介する。

本稿でもっとも強調したい点は、文法や語彙について「知っている」ということと、それを「使える」ということは全く別物であるということである。これは一見「誰もが当然と考えること」のように見えて、実はあまりよく理解されていないということを、現在の初級教育のあり方やタスクの使い方を例に明らかにしていきたい。

タイ人日本語学習者の文末「よ」の聞き取り

Promjit Niyomvanich

文末「よ」を題材に、声調言語を母語とするタイ人日本語学習者（以降「タイ人」と記載）と、日本語の共通語を母語とする東京方言話者を対象者として聞き取り調査を行った結果、東京方言話者とタイ人の回答に有意差が多く見られるのは平坦と下降音調であった。

タイ語は5つの声調があり、各音節の声調パターンが決まっているが、文末「よ」も、拍内で高低が変化する点で声調言語に類似していることから、タイ人は文末「よ」の音調を無意識に声調に結びつけて処理している可能性がある。ところが、タイ語の声調と比較すると、文末「よ」の音調のうち、上昇音調は4声「高声」または5声「上声」に当てはまるが、平坦と下降音調は共に2声「低声」にしか当てはまらない。そのため、タイ人にはこの二つの音調が聞き分けられないと考えられる。したがって、平坦と下降音調で最も多く有意差が見られたのは、タイ人が文末音調をタイ語の声調に当てはめて処理しているためであると推測される。

以上のことから、タイ人を対象に文末「よ」の発話指導を行う際には、むしろ声調を利用した方が効果的だと言える。つまり、

- ・ 賛成の「いいよ」を言いたいときに2声ではなく、4声か5声で「よ」を発話する。
- ・ 断りの「いいよ」を言いたいときに4声や5声ではなく、2声で「よ」を発話する。
- ・ それ以外の「よ」のときに不愉快感を伝えたくなければ、4声か5声で「よ」を発話する。

タイ語の「caj」について——日本語の「気」と比較して

Aradee Apiwongngam

夏目漱石の『こころ』を翻訳した Preeya Inkapirom の“Kokoro”を通じて「caj」の表現を検討した。又、タイ語辞典における「caj」の定義と、“Kokoro”の文脈の中で訳された感情表現の「caj」とを比較して、「caj」の意味範囲を考察すると次のようにまとめることができる。

“Kokoro”の中でタイ語は意味を強調する時に、心臓の近くにある体の部位の呼称を使って表現する。「tòg ʔoḡ (胸) tòg caj (びっくりする)」という表現では「ʔoḡ (胸)」という言葉を使って感情表現を作っている。更に、「khoo (首)」を使った表現として「caj khoo (首)」は「気質」という意味になる。日本語の場合、タイ語の「caj」に当てはまる「胸」という言葉において、「胸を痛める」や「胸がすうっとする」という表現などもあるが日本語で「首」を使って「気質」の意味を表す表現はない。又、日本語の「神経」という名詞については「神経を昂奮させる」という表現はタイ語では「caj mâj juù kàb tua」と訳せる。それ以外は全般的に日本語の「心」の表現はタイ語の「caj」の表現に当てはまることが殆どであると言える。

「赤と白」が象徴する対照性——『雪国』考——

Nanchaya Mahakhan

日本伝統文化の中の色彩、「紅白」が対抗の意義を持っていることを基礎にして、川端文学に配色されている赤と白が「対照性」を表象すると仮説をたて、「雪国」を取り上げ、考察した。「雪国」には赤と白が、火雪、天地、上下、男女、静動、熱冷、都会と田舎などのものと関連すると見られ、対照的な物事が数多く表現されているとまとめられる。オリエンタル的な世界観、陰陽思想が美化され語られた作品だとも言えよう。すなわち、古典的な手法を取り入れ、特にストーリーの最終的な「雪中火事」と「天の河」の章は、いわゆる劇的な舞台になっていると見られる。

「雪国」を紅白の色彩から入り、作品の場面場面を分析した結果、本論文で、赤と白の色彩が対照的なことを表象していると明快に結論を出せる。

単純なリピートが発音に与える効果 — 教室でのリピートはどの程度役に立つのか —

千葉真人、佐藤 純

本研究の目的は、教師がモデル発音を示して学習者に模倣して言わせる「単純なリピート」によって学習者の単音の発音が向上するかどうかを明らかにすることである。そのため、タイ人学習者にとって苦手な発音である「し」と「ち」やザ行の音声について、初級学習者10人の協力を得てリピート実験を行った。

その結果、①単純なリピートによって単音の発音がよくなることはほとんどない、②適当な発音基準を持つことが単音を正しく発音することに繋がる可能性がある、③適当な発音基準を持っていたとしても、発音に意識が回っていない場合や発音に問題があるという意識が薄い場合は発音がよくなる、という3点が明らかになった。

このことから、学習者が適当な発音基準を持てるような、そして学習者が発音に意識を向けるような指導を教室でしていくことを提言したい。

観光学科3年生の「カンチャナブリ模擬ツアー」実践報告

大野直子

カンチャナブリ・ラチャパット大学では、1994年度より、経営学部観光学科の学生の日本語学習終了時に、「カンチャナブリ模擬ツアー」を実施している。これは、日本人に観光客になっていただき、学生がガイドや添乗員などになって、カンチャナブリを案内するという活動である。

観光学科の学生にとって、日本語は選択科目であり、日本語学習に対する動機付けが難しい。また、日本語を3年間勉強しても、観光業の現場で、日本語を使って仕事をするレベルには達することが難しいのが現状である。学生の日本語学習の動機を高めるにはどうしたらいいかという取り組みの中で始まったのが、この「カンチャナブリ模擬ツアー」である。

筆者は、この企画の第10回目、第11回目にあたる2003年度、2004年度の計2回を担当した。本稿は、2003年度の反省を踏まえ改善した2004年度「模擬ツアー」の実践報告をまとめ、さらに2004年度の反省点と改善案についての考えをまとめたものである。

チェンマイ大学ガイド実習「チェンマイ半日ツアー」の試み

吉田直子

チェンマイ大学日本語学科では日本語主専攻4年生後期の必修選択科目として「ガイドの日本語」を開講し、筆者は2000年度から当コースを担当している。この間、教室内の学習を実践し、さらに実践から学ぶことを目的に、日本人にチェンマイ市内を案内するガイド実習を行ってきた。

最初2年間はチェンマイ大学を訪問中の日本人大学生からの協力を得、2002年度からは大学外の一般の日本人から希望者を募って、より現実に近い形のツアーを実施することができた。現実に近いツアーを行うことにより学習者や日本人協力者の満足度は高まるが、それなりのリスクや労力も伴う。日本人協力者の募集方法、受付作業などについてはまだ試行錯誤を重ねているところである。本稿では2004年1月に実施したガイド実習「チェンマイ半日ツアー」を1つの実践例として報告する。

日本語教育的実践としての「インターネット・ホームページ・イーラーニング」 —筆者の試行錯誤的経験に基づいて—

森 康眞

本稿は、筆者が「パソコン（コンピュータ）」の諸機能に注目して、取り組んできた「実践」を報告するものである。この「実践」は、日本語教育という観点から、試行錯誤的に取り組んできた、筆者の「経験」でもある。

この「経験」の中で、まず、インターネットを使って、「学生・教師による電子メール交換」を実施した。この電子メールの交換は「対面的会話」を進めるのに有益であった。これを機に、学生との「日本語交流」を図るべく、「ホームページの自主制作」を試みた。このホームページでは、1)「情報源（リソース）」、2)「学習ツール」、3) インタラクティブ（双方向的交流）の観点に基づいて、「日本語科ホームページ（試作品）」を発信した。更に、学内の「セルフアクセス・ラーニング・センター」における「課外学習」と、インターネットを活用しての「自律学習」とを融合する形で、「イーラーニング（電子教育）」を試みた。これは、筆者が勤務する大学のウェブサイトのイーラーニングに新たに「日本語科目ホームページ」を置く、というものである。「日本語科目ホームページ」のリンクに「日本語科ホームページ（試作品）」を載せ、筆者のこれまでの個別的取り組みを一つにまとめたものとなった。パソコン（コンピュータ）に始まる、インターネット、ホームページ、そして、イーラーニングへの展開は、筆者の「実現すべく日本語教育的実践」として、今後も一歩ずつ進めていきたいと考えている。

一般日本人・日本語アシスタントによる「日本語教育活動」の意義 ー異文化間コミュニケーションと日本語学習支援の立場からー

森 康眞

本稿は、一般日本人による「日本語教育活動」の意義を、「異文化間コミュニケーション」と「日本語学習支援」の視点から、筆者が行ってきた事例に基づいて考察したものである。二つの視点を置いたのは、日本国内の一般日本語教育が「生活支援」と「学習支援」を軸にした「多文化共生社会」の構築にあるのに対して、海外の場合、「異文化間コミュニケーション」と「学習支援」を軸にすることによって、一般日本人とタイ人学習者のインターアクションの機会を創出しうるのではないか、という期待である。詰まり、「教室外の日本人と教室内の学習者を結び付ける方法」である。

その期待を実現するべく、筆者は、教室外の人的リソースに注目し、日本語教育活動に協力する日本人を、「日本語アシスタント」として受入れ、教室内の学習者と繋げる方法を考えた。その具体的な方法は、1) ビジター・セッション、2) ランゲージ・パートナー、3) 日本文化紹介のアクティビティ、4) ティーチング・アシスタント、である。本稿では、まず、これらの事例を紹介し、次に、学習者からの評価を踏まえて、そして、異文化交流の立場と自律学習促進の立場から、「一般日本人・日本語アシスタントによる日本語教育活動」を検証してみた。最後に、今後の可能性を展望し、日本語教師の役割を確認した。

ウボンラチャタニ大学教養学部日本語学科開設に向けての動き

池田 隆

ウボンラチャタニ大学は1990年に創立された大学で、当時から、教養学部はその前身である言語文化センターで日本語を含む外国語教育を行ってきた。そして、2006年6月には日本語学科開設が予定されている。

優れた人格と高い日本語能力を併せ持つ人物の育成を目指し、カリキュラム原案を作成した。総履修単位数は139単位である。その内訳は、一般教養科目34単位、専門科目102単位（主専攻87単位、副専攻15単位）、自由選択科目3単位となっている。

会話授業における個別フィードバックの効果について ー学習者自身による会話の文字化を用いてー

関 裕子

本稿は筆者が担当した日本語が初級後半から中級前半レベルの学習者の会話・聴解の授業で行った会話練習における個別フィードバックと学習者の感想を報告するものである。

筆者は学習者が自分自身の発話の中に現れる文法的な誤りや談話技能の使用の有無などの問題点について、視覚によって客観的、かつ具体的に認識し、さらにそれらを意識して改善していくことを目的として、学習者に学習者自らが話し手聞き手として参加している会話を文字化する課題を課した。そしてその文字化スクリプトと会話が録音されたテープを用いて、個別にフィードバックを行った。学習者の感想から、学習者は文字化したことで文法的な誤りや欠点を認識できたこと、教師から指摘、助言によって、自分では気づかなかった問題点を認識し、改善に向ける手がかりを得られたことがわかった。その一方で、聞いた音を文字化することの難しさや文字化をする際の時間的な負担についてなど、否定的な感想も見られた。

タイの中等教育用日本語教科書作成プロジェクト

Bussaba Banchongmanee

今枝亜紀

Prapa Sangthongsuk

タイでは、中等教育機関における日本語教育の量的充実、教育省による新・基礎教育カリキュラムの施行等を背景に、教育現場からタイの実情にあった新しい日本語教科書を求める声が高まり、教育省と国際交流基金の協力によって2000年度から中等教育用日本語教科書作成プロジェクトが始められた。教科書作成はタイの高校教員、大学教員、国際交流基金講師からなる執筆委員会によって進められた。事前アンケートによるニーズ調査を参考にシラバスを作成し、原稿執筆、検討を行ない、中等教育機関での試用を経て2004年度に市販版の販売を開始した。ここではこの教科書作成プロジェクト及びその成果である日本語教科書『あきこと友だち』の概要を紹介し、教科書作成プロジェクトについて考察する。

タイにおける日本語聴解教育の現状と課題

Sukanya Thongdeenok

本稿では、タイにおける日本語聴解教育の開発方法を探るため、聴解教育に関する先行研究及びタイでの日本語聴解教育の現状に関する研究を概観し、改善すべき課題を考察する。

内容は三つに分けられる。まず、聴解教育に関する先行研究について述べる。次にタイ国における日本語聴解教育の現状・関連する制約や条件・問題等も含めて述べ、最後に明らかにすべき課題について述べる。

流暢さと正確さ ―タイの大学での実践を踏まえて―

藤井明子

授業の中では、流暢さと正確さを同時に伸ばしていかななくてはならないが、そのバランスを取っていくのはむずかしい。

コミュニケーション活動をするためには、まず学習者にコミュニケーション活動とはどういうものか紹介し、学習者が活動に参加できるよう、訓練しなければならない。この期間は、学習者が自ら発信することが重要なので、流暢さのほうが重視されよう。

学習者がコミュニケーション活動に慣れてきたら、流暢さと正確さのバランスを考えて、授業を計画していかななくてはならない。筆者が実際の授業で使ったコミュニケーション活動を例に挙げ、学習目標である表現を使った活動、誤用訂正のためのフィードバックの重要性についてまとめた。

文化リテラシーを身に付けるための授業設計のストラテジーと『あきこと友だち』

Prapa Sangthongsuk

八田直美

矢部(2001)は、初中等教育における日本語教育の目標が文化リテラシー（異なる文化を捉え、受け止め、対応する能力）の育成にあるとし、文化リテラシーと、それを育成するための授業設計のストラテジーの内容を分類し、それぞれのリテラシーの育成にどのストラテジーが有効かを明らかにしている。本稿では、国際交流基金がタイの中等教育向けに開発した初級日本語教科書『あきこと友だち』の内容を分析し、上記のどのようなリテラシーに着目しているか、また設問や教室活動にどのようなストラテジーが採用されているか現状をまとめた。さらに発展的な利用の可能性も提示した。

パソコンで日本語のアクセント記号が付いた教材を作成する方法 —組版用ソフトウェア TeX を用いて—

松原 潤

パソコンを使って日本語のアクセント記号が付いた教材を作成する際、筆者はこれまでマイクロソフト社の Microsoft Word を使っていた。具体的には、図形描写ツールを使用し、マウスを操作して文字の上に直線を引いていた。

しかし、この方法だと、線が斜めになったり、接点がずれたりし、また、文書の作成途中で線が移動してしまうなどの問題があった。さらに、マウスを操作して線を引くというのは、非常に細かい作業で、時間もかかり根気の要る作業であった。

筆者は、上記の問題を解決するためには、組版用ソフトウェア TeX を採用するのが最善策だと考え、TeX で日本語のアクセント記号を出力する方法を検討した。

本稿は、TeX を用いて日本語のアクセント記号を出力する方法とその導入方法を紹介する。

2004 年のタイ大学入試と日本語を受験科目に指定した大学専攻

海老原智治

本稿は、タイの日本語教育の基礎データを教育実務者間で共有することを目的として、タイ政府が全国一斉に実施する大学入試「高等教育委員会高等教育機関入学試験」(統一入試)について、2004 年の実施を中心に同入試一般及び日本語に関連するデータを提示し解説する。

2004 年の統一入試には 79 校の参加があった。日本語は 19 大学 87 専攻で試験科目に指定された。しかし 1 大学 1 専攻を除き選択科目の扱いであったので日本語を選択せずとも受験できた。

2004 年の統一入試で受験できた日本語専攻は 12 大学 12 専攻であった。日本語を試験科目に指定したのは 10 大学 10 専攻であった。2 大学 2 専攻は指定しなかった。

統一入試の実施方式は 2006 年以降に大きく変更することが現在議論されている。

資料として次の表を掲載する。

- (1) 「2004 年高等教育機関入学者選抜試験 (統一入試) に日本語を設定した大学と専攻・試験科目」
- (2) 「2004 年高等教育機関入学者選抜試験 (統一入試) の設定科目と得点分布」
- (3) 「2004 年高等教育機関入学者選抜試験 (統一入試) の大学別募集定員・面接資格者数・入学資格者数」
- (4) 「2004 年国立 Univ./Institute 入学者数に対する大学別の統一入試と直接入試の定員比率」

「タイ国内日本人家庭ホームステイプログラム」 関わった人たちにどんな意義があったか ―学習者・教師・日本人協力者 3 者の調査報告―

深澤伸子

2003 年 7 月、タイ南部のラーチャパット・ナコンシータマラートの学生がバンコク日本人家庭でホームステイを行った。日本語教育においてホームステイプログラムに関わるのは、学習者と日本人協力者はもとより教師もその一員である。しかし、関わった 3 者全てに対して行った調査はない。プログラムの意義を考える場合、そこに関わった全ての立場の人にとってどんな意義があったのか、それを明らかにしないことにはプログラム全体の可能性が見えてこない。本稿はこの活動に関わった 3 者全てにとってどのような意義があったのか調査をし、報告するものである。

ビジネスで使う日本語を考える―企業と教育現場の視点から―

(タイ国日本語教育研究会調査及びシンポジウム報告)

タナサーンセーニー 美香、高坂千夏子、

當山 純、中井雅也、深澤伸子

本稿は、「学校で日本語を学んだ学習は卒業後日本語が使えているのだろうか」という日本語教師たちの疑問をきっかけに始まったタイ国日本語教育研究会の一連の調査、およびその調査をもとに組み立てられた研究会の年次セミナー（2005年3月開催）におけるシンポジウムの内容をまとめたものである。日本と経済的つながりの強いタイでは日系企業が多く進出しており、職場で日本語が使われるケースも多いという。では、実際にビジネス現場で求められている日本語能力とはどのようなもので、教育はどこまでそのニーズに対応できているのだろうか。調査では、企業、そしてタイの大学で日本語を学び職場で日本語を使っている卒業生の声を聞き、ビジネス現場のニーズを検証した。さらに、大学側の取り組みを調査し、ビジネス現場のニーズと照らし合わせることで、今後の教育の課題を考えた。その結果、実際のビジネス現場で要求される日本語力を育てるためには、知識だけでは不十分で、教室の中に体験的な学習を多く取り入れることの大切さが見えてきた。また、仕事の現場で日本語を生かすには、文化背景の違いを認識し、それを双方に伝えていく力を養うことの必要性にも焦点が当てられた。

การหันกลับมาทบทวนการเรียนการสอนในระดับต้น เพื่อให้ผู้เรียนได้รู้สึกที่สามารถพูดได้

KOYAMA Satoru

บทความนี้ได้แก้ไขเพิ่มเติมจากการบรรยายในการสัมมนาการศึกษาภาษาญี่ปุ่นที่จัดขึ้นที่เจแปนฟาวน์เดชั่น กรุงเทพฯ ในวันที่ 11 เดือนมีนาคม 2005

“จะทำอย่างไรจะให้ผู้เรียนที่มีความรู้ทางด้านไวยากรณ์ และคำศัพท์ แต่ไม่สามารถนำความรู้นั้นมาใช้ได้ดี และให้รู้สึกได้ว่าตัวเอง‘สามารถพูดได้’” เพื่อที่จะตอบคำถามนี้ ในตอนต้นของบทความจะกล่าวถึงสาเหตุพื้นฐานที่ทำให้เกิดช่องว่างระหว่างความรู้กับความสามารถในการใช้ภาษา จากมุมมองทางภาษาศาสตร์ 2 ประเด็นคือ ความรู้เกี่ยวกับการใช้ภาษาและความสามารถในการใช้ภาษา นอกจากนั้นจะกล่าวถึงปัญหาการสอนขั้นต้นแบบ 積み上げ式 พร้อมกับแนะนำข้อคิด 3 ข้อที่ได้นำมาใช้ในตำรา J.Bridge เพื่อแก้ปัญหาดังกล่าวอย่างเป็นรูปธรรม ได้แก่ 1.การเปลี่ยนแปลงลำดับความคิด 2. การฝึกเข้าไปซ้ำมาหลายๆ ครั้ง 3. สร้างกระบวนการเรียนรู้

เรื่องที่ต้องการเน้นอย่างยิ่งในบทความนี้ คือความรู้เรื่องไวยากรณ์และคำศัพท์ กับความสามารถในการใช้ไวยากรณ์และคำศัพท์นั้นเป็นเรื่องที่แตกต่างกันอย่างสิ้นเชิง เรื่องนี้หากมองดูอย่างผิวเผินแล้ว “ทุกคนคิดว่าเป็นเรื่องที่ทราบกันดีอยู่แล้ว” แต่จริงๆ แล้วเป็นเรื่องที่ยังไม่ค่อยเข้าใจกันดีนัก ในบทความนี้จะยกตัวอย่างการใช้ Task และรูปแบบการเรียนขั้นต้นในปัจจุบันเพื่อให้เข้าใจได้อย่างชัดเจนยิ่งขึ้น

การฟังรูป “yo” ท้ายประโยคภาษาญี่ปุ่นของนักเรียนไทย

Promjit Niyomvanich

การวิจัยนี้เป็นการศึกษาการฟังประโยคที่ลงท้ายด้วย “yo” ของชาวโตเกียวและนักเรียนไทย จากการวิจัยพบว่าคำตอบของทั้งคู่จะแตกต่างกันมากในประโยคที่ลงท้ายด้วย “yo” ที่เป็นเสียงต่ำและเสียงกลาง ระบบเสียงลงท้ายประโยค “yo” เป็นการเปลี่ยนแปลงของเสียงสูงต่ำภายใน ๑ พยางค์พิเศษ (mora) ซึ่งคล้ายกับระบบการเปลี่ยนแปลงของเสียงสูงต่ำภายในพยางค์ (วรรณยุกต์) ของไทย เมื่อเปรียบเทียบทำนองเสียงของ “yo” ที่ใช้ในการวิจัยในครั้งนี้ จะเห็นได้ว่า เสียงสูงของ “yo” เทียบได้กับเสียงตรีและจัตวา ส่วนเสียงต่ำและเสียงกลางของ “yo” เทียบได้กับเสียงเอกเพียงเสียงเดียว จึงอาจเป็นเหตุให้นักเรียนไทยไม่สามารถแยกความแตกต่างของทั้ง ๒ เสียงนี้ได้ แต่ผู้สอนอาจนำระบบเสียงวรรณยุกต์นี้มาช่วยในการสอนได้ดังต่อไปนี้

๑. ถ้าต้องการพูดตอบรับโดยใช้รูป “iiyo” อย่าออกเสียง “yo” ด้วยเสียงเอก แต่ให้ออกด้วยเสียงตรีหรือจัตวา
๒. ถ้าต้องการพูดปฏิเสธโดยใช้รูป “iiyo” อย่าออกเสียง “yo” ด้วยเสียงตรีหรือจัตวา แต่ให้ออกด้วยเสียงเอก
๓. ถ้าไม่ได้รู้สึกไม่พอใจ อย่าออกเสียง “yo” ด้วยเสียงเอก แต่ให้ออกด้วยเสียงตรีหรือจัตวา

เปรียบเทียบการใช้สำนวน “ใจ” กับสำนวนภาษาญี่ปุ่น “Ki”

อารตี อภิวงศ์งาม

เปรียบเทียบการใช้สำนวน “ใจ” ที่แปลมาจาก “Kokoro” ของนัตซีเมะ โซเซกิโดยปริยา อิงคภิรมย์กับสำนวน “Ki” ในภาษาญี่ปุ่นรวมทั้งศึกษาสำนวนที่ใช้ “Ki” และเปรียบเทียบคำนิยามของคำว่า “ใจ” จากพจนานุกรมกับสำนวนที่แปลของปริยาด้วย พอสรุปได้ว่าในภาษาไทยมีการเน้นคำพูดเพื่อแสดงอารมณ์จะใช้อวัยวะที่อยู่ใกล้กันเช่น “อก” ตัวอย่างเช่น “ตกอกตกใจ” หรือการใช้คำว่า “คอ” เพื่อแสดงนิสัยเช่น “นิสัยใจคอ” ภาษาญี่ปุ่นมีสำนวนที่ใช้ “อก” ในการแสดงความรู้สึกเช่น 「胸を痛める และ 胸がすうっとする」 แต่ไม่มี สำนวนการใช้ “คอ” เพื่อแสดงนิสัย แต่มีสำนวนการใช้ 「神経」 (เส้นประสาท) 「神経を 昂奮させる」 ซึ่งตรง กับภาษาไทยว่า “ใจไม่อยู่กับตัว” นอกจากนี้จะมีคำภาษาญี่ปุ่นที่สามารถแปลเป็นสำนวน “ใจ” ได้แทบจะทั้งหมด คือ 「心」

บทบาทของสีแดงและสีขาวที่แสดงคุณภาพของความแตกต่างในวรรณกรรมเรื่อง เมืองหิมะ

นันท์ชญา มหาจันทร์

บทความวิชาการเรื่องนี้ เริ่มต้นจากการตั้งสมมุติฐาน เรื่องการใช้สีแดง-ขาวในวรรณกรรมเรื่อง เมืองหิมะ ของคะวะบะตะ ยะสึนะริ ว่าแสดงถึงความแตกต่าง โดยใช้พื้นฐานแนวคิดเรื่องสีแดง-ขาวในวัฒนธรรมญี่ปุ่นโบราณ ซึ่งแสดงถึงสองชั่วที่ตรงกันข้าม เมื่อวิเคราะห์ ส่วนต่างๆ ของ เมืองหิมะ แล้ว พบว่ามีการใช้สีแดง-ขาว สื่อถึงสิ่งที่แตกต่างกันที่ปรากฏร่วมกัน เช่น ไฟกับหิมะ ฟ้ากับดิน เบื้องบนกับเบื้องล่าง ชายกับหญิง สงบกับเคลื่อนไหว ร้อนกับเย็น เมืองกับชนบท เป็นต้น สามารถสรุปได้ว่า สิ่งเหล่านี้มีความสัมพันธ์กับโลกทัศน์เรื่องคุณภาพของจักรวาล ของชาวตะวันออก หรืออีกนัยหนึ่ง คือ ความแตกต่างที่ดำรงอยู่ร่วมกัน อย่างสมดุล และ คะวะบะตะได้ให้บทบาทแก่สีแดง-ขาว ในการสื่อประเด็นสำคัญนี้

ประสิทธิผลของการให้พูดซ้ำต่อการแก้ไขการออกเสียง
- การให้พูดซ้ำๆในห้องเรียนมีประโยชน์ต่อผู้เรียนเพียงใด -

CHIBA Masahito

SATO Jun

การวิจัยนี้เพื่อจะแสดงให้เห็นว่า การที่ผู้สอนออกเสียงเป็นแม่แบบให้ผู้เรียนฟังและให้ผู้เรียนออกเสียงตามหลาย ๆ ครั้งนั้น จะมีผลทำให้การออกเสียงของผู้เรียนดีขึ้นหรือไม่ โดยได้ทำการทดสอบผู้เรียนภาษาญี่ปุ่นชั้นต้นจำนวน 10 คน ให้ออกเสียง "shi" "chi" และ วรรค"za" ซึ่งเป็นเสียงที่ผู้เรียนคนไทยออกเสียงยาก ผลจากการทดสอบพบว่า

- 1.การให้ผู้เรียนออกเสียงซ้ำหลาย ๆ ครั้งนั้น แทบไม่มีผลต่อการแก้ไขการออกเสียงเลย
2. มีความเป็นไปได้ว่าผู้เรียนจะสามารถแก้ไขการออกเสียงให้ดีขึ้นได้ ถ้าเข้าใจวิธีการออกเสียงที่ถูกต้อง
- 3.ถึงแม้จะเข้าใจวิธีการออกเสียงที่ถูกต้อง แต่ถ้าผู้เรียนไม่มีความตั้งใจที่จะแก้ไขข้อบกพร่องดังกล่าว หรือไม่คิดว่าการออกเสียงตัวอักษรดังกล่าวของตนเองเป็นปัญหาก็จะแก้ไขได้ยาก

จากผลการทดสอบนี้จึงอยากจะเสนอว่า ผู้สอนควรจะสอนหรือชี้แนะให้ผู้เรียนเข้าใจวิธีการออกเสียงที่ถูกต้อง หรือพยายามทำให้ผู้เรียนมีความสนใจในการแก้ไขการออกเสียง ซึ่งน่าจะช่วยในการแก้ไขการออกเสียงของผู้เรียนได้

รายงานการปฏิบัติจริงเรื่องการทดลองฝึกปฏิบัติการทัวร์เมืองกาญจน์ของ
วิชาการท่องเที่ยวและการโรงแรมชั้นปีที่3

ONO Naoko

มหาวิทยาลัยราชภัฏกาญจนบุรีได้จัดกิจกรรมการทดลองฝึกปฏิบัติการทัวร์เมืองกาญจน์ให้กับนักศึกษาโปรแกรมวิชาการท่องเที่ยวและการโรงแรมคณะวิทยาการจัดการได้นำความรู้ที่เรียนมาไปใช้ในสถานการณ์จริงฝึกปฏิบัติเป็นหัวหน้าทัวร์หรือมัคคุเทศก์โดยได้รับความร่วมมือจากชาวญี่ปุ่นที่อยู่ในประเทศไทยมาเป็นลูกทัวร์(สมมุติให้ตามสถานการณ์)

นักศึกษาในกลุ่มนี้เรียนภาษาญี่ปุ่นเพียงแค่วิชาเลือกเสรีเท่านั้นจึงไม่มีความกระตือรือร้นในการเรียนภาษาญี่ปุ่นเพื่อจะนำไปใช้แม้ว่าเรียนภาษาญี่ปุ่น3ปีแล้วความรู้ก็ยังอยู่ในระดับขั้นพื้นฐานไม่สามารถนำไปใช้ในการทำงานได้โครงการนี้จึงมีวัตถุประสงค์2ประการคือ เพื่อให้นักศึกษามีความกระตือรือร้นที่จะเรียนภาษาญี่ปุ่นมากกว่านี้และเพื่อนำความรู้ภาษาญี่ปุ่นมาใช้ในการทำงานให้มากที่สุด ดิฉันรับผิดชอบโครงการนี้ 2ครั้งประจำปี 1/2546และ2/2547นับเป็นครั้งที่10-11แล้ว ปีพ.ศ.2547ได้ทำรายงานสรุปผลการดำเนินงานเพื่อนำไปพัฒนาปรับปรุงการเรียนการสอนให้มีประสิทธิภาพดียิ่งขึ้นต่อไป

การฝึกปฏิบัติของนักศึกษามหาวิทยาลัยเชียงใหม่ในหัวข้อ “ การทัวร์เชียงใหม่ครั้งวัน ”

YOSHIDA Naoko

วิชาภาษาญี่ปุ่นสำหรับไคดของสาขาวิชาภาษาญี่ปุ่นมหาวิทยาลัยเชียงใหม่ เปิดเป็นวิชาบังคับเลือกของนักศึกษาชั้นปีที่ 4 สำหรับลงทะเบียนในเทอมที่ 2 ซึ่งผู้เขียนเป็นผู้รับผิดชอบการสอนตั้งแต่ปี พ.ศ. 2543 เป็นต้นมา ในกระบวนการศึกษาดังกล่าวได้จัดให้มีการฝึกปฏิบัติจริง ซึ่งเป้าหมายของการฝึกคือ การนำสิ่งที่เรียนในห้องเรียนไปใช้ปฏิบัติจริงและเพื่อได้เรียนรู้จากประสบการณ์จริง และการฝึกใช้คือการฝึกเป็นภาคพิเศษที่แนะนำจังหวัดเชียงใหม่ให้กับคนญี่ปุ่น

ในช่วง 2 ปีแรก การฝึกเป็นภาคพิเศษได้รับความร่วมมือจากนักศึกษาญี่ปุ่นที่มาเยือนมหาวิทยาลัยเชียงใหม่ และในปีต่อมาได้ขอความร่วมมือจากชาวญี่ปุ่นทั่วไปที่อาศัยอยู่ในจังหวัดเชียงใหม่ ซึ่งนักศึกษาสามารถปฏิบัติได้ใกล้เคียงกับสถานการณ์จริงของการเป็นภาคพิเศษ และการฝึกนั้นถือว่าประสบความสำเร็จเป็นอย่างดี ทั้งนี้การฝึกดังกล่าวยังประสบปัญหาอยู่บ้างและได้มีการปรับเปลี่ยนเพื่อความเหมาะสมมาตลอด ในรายงานดังต่อไปนี้เป็นตัวอย่างเป็นหนึ่งจากการฝึกจริงของนักศึกษาในหัวข้อ “การทัวร์เชียงใหม่ครั้งวัน” เมื่อเดือนมกราคม พ.ศ. 2547

การทดลองใช้ “อินเทอร์เน็ต – โฮมเพจ – สื่อการเรียนรู้อิเล็กทรอนิกส์” ในการสอนภาษาญี่ปุ่น:
กรณีศึกษาจากความพยายามและข้อผิดพลาดของผู้เขียน

MORI Yasumasa

บทความนี้เป็นการรายงานการทดลองใช้อินเทอร์เน็ต โฮมเพจ สื่อการเรียนรู้ ทางอิเล็กทรอนิกส์โดยใช้คอมพิวเตอร์ นับเป็นประสบการณ์ของผู้เขียนเองซึ่งได้ทบทวนตนเองในแง่ของการสอนภาษาญี่ปุ่นจากประสบการณ์ ประการแรก ที่ผู้เขียนได้ทดลองใช้ คือ การส่งจดหมายอิเล็กทรอนิกส์ระหว่างผู้เรียนและผู้เขียนเองซึ่งเป็นผู้สอน การส่งจดหมายอิเล็กทรอนิกส์ช่วยพัฒนาให้มีโอกาสเหมือนการสนทนาตัวต่อตัวกับผู้เรียน ประการที่สอง ผู้เขียนได้จัดทำโฮมเพจหมวดวิชาภาษาญี่ปุ่น โดยตั้งใจแลกเปลี่ยนข้อคิดเห็นกับผู้เรียนด้วยภาษาญี่ปุ่น และโฮมเพจของหมวดวิชาภาษาญี่ปุ่นดังกล่าวได้จัดทำขึ้นมาเพื่อวัตถุประสงค์คือ 1) เพื่อเป็นแหล่งข้อมูลการเรียนรู้ 2) เพื่อเป็นสื่อการเรียนรู้ 3) เพื่อการแลกเปลี่ยนความคิดเห็นอย่างมีปฏิสัมพันธ์ ประการที่สาม ผู้เขียนได้พยายามให้เกิดการเรียนรู้ด้วยตนเองโดยผ่านสื่ออิเล็กทรอนิกส์ เพิ่มเติมจากหลักสูตรที่ได้กำหนดไว้ในสถาบัน เพื่อให้ผู้เรียนเรียนรู้ผ่านการใช้อินเทอร์เน็ต กล่าวคือ ได้นำโฮมเพจมาทดลองใช้บนเครือข่ายของมหาวิทยาลัยในส่วนของหมวดวิชาภาษาญี่ปุ่นซึ่งมีโฮมเพจของรายวิชาภาษาญี่ปุ่น ที่นับเป็นการรวบรวมข้อมูลซึ่งผู้เขียนเองได้ดำเนินการเรื่อย ๆ มา โดยการพัฒนาจากการใช้คอมพิวเตอร์มาเป็นการใช้อินเทอร์เน็ต และจากการใช้อินเทอร์เน็ตมาเป็นโฮมเพจ และจากการใช้โฮมเพจเป็นการใช้สื่อการเรียนรู้อิเล็กทรอนิกส์ ผู้เขียนตั้งใจว่าจะพัฒนาสื่อดังกล่าวให้ก้าวหน้ามากขึ้นในอนาคตเพื่อให้ผู้เรียนมีโอกาสได้ฝึกฝนอย่างแท้จริงในการศึกษาภาษาญี่ปุ่น

ความสำคัญของกิจกรรมด้านการเรียนการสอนภาษาญี่ปุ่นโดยชาวญี่ปุ่นทั่ว ๆ ไปในฐานะที่เป็นผู้ช่วยสอน
ภาษา: นับเป็นการแลกเปลี่ยนวัฒนธรรมโดยการสื่อสารด้วยภาษาญี่ปุ่นและช่วยสนับสนุนผู้เรียนให้เกิด
การเรียนรู้ภาษาญี่ปุ่นมากขึ้น

MORI Yasumasa

บทความนี้ กล่าวถึงความสำคัญของกิจกรรมเพื่อการเรียนรู้ภาษาญี่ปุ่นจากประสบการณ์ตรงของผู้เขียนเอง เพื่อ
เปิดโอกาสให้ผู้เรียนชาวไทยได้มีโอกาสปฏิสัมพันธ์กับชาวญี่ปุ่นมากขึ้น ผู้เขียนชี้ให้เห็นถึง แหล่งความรู้ที่สำคัญคือ
ตัวบุคคลนอกห้องเรียน อีกทั้ง ยังระบุถึง การสร้างสัมพันธ์ภาพอันดีกับชาวญี่ปุ่นโดยทั่วไปนอกห้องเรียน การจัดกิจกรรม
การเรียนรู้ จัดให้มีผู้ช่วยสอนภาษาญี่ปุ่น จัดหาชาวญี่ปุ่นที่ให้ความร่วมมือกับกิจกรรมต่าง ๆ เพื่อการเรียนรู้ภาษา
ญี่ปุ่นประเด็นสำคัญของการศึกษาค้นคว้าครั้งนี้ 1) แลกผู้มาเยือนชาวญี่ปุ่นทั่วไป 2) คู่สนทนาของผู้เรียนภาษาญี่ปุ่น
3) กิจกรรมนำเสนอวัฒนธรรมญี่ปุ่นโดยชาวญี่ปุ่นทั่วไป 4) ชาวญี่ปุ่นทั่วไปมาเป็นผู้ช่วยสอนในชั้นเรียน

จากการวิเคราะห์ผลจากแบบประเมินผลโดยผู้เรียน พบสองประเด็นสำคัญคือ พฤติกรรมด้านวัฒนธรรมและการ
เรียนรู้ภาษาด้วยตนเอง ในตอนท้ายของบทความได้กล่าวถึง เป้าหมายและบทบาทของครูผู้สอนภาษาญี่ปุ่นใน
อนาคตด้วย

การดำเนินงานสู่การเปิดภาควิชาภาษาญี่ปุ่น คณะศิลปศาสตร์ มหาวิทยาลัยอุบลราชธานี

IKEDA Takashi

มหาวิทยาลัยอุบลราชธานีก่อตั้งขึ้นเมื่อปีพ.ศ.2533 นับตั้งแต่นั้นมา คณะศิลปศาสตร์ซึ่งในขณะนั้นยังเป็น
สถาบันภาษาและวัฒนธรรม ได้มีการก่อตั้งกลุ่มวิชาภาษาต่างประเทศขึ้นโดยมีภาษาญี่ปุ่นรวมอยู่ด้วย และได้มีการ
วางแผนที่จะก่อตั้งภาควิชาภาษาญี่ปุ่นขึ้นในปี พ.ศ. 2549 ด้วยมุ่งเน้นที่จะผลิตบุคลากรที่ดีมีคุณภาพและมีความรู้
ความสามารถในด้านภาษาญี่ปุ่นในระดับสูง จึงได้มีการจัดทำหลักสูตรวิชาเอกภาษาญี่ปุ่นขึ้น โดยกำหนดให้มีหน่วยกิต
รวมตลอดหลักสูตร จำนวน 139 หน่วยกิต โดยแบ่งเป็นรายวิชาศึกษาทั่วไปจำนวน 34 หน่วยกิต รายวิชาเอกจำนวน
102 หน่วยกิต (วิชาเอก 87 หน่วยกิต, วิชาโท 15 หน่วยกิต) และรายวิชาเลือกเสรีจำนวน 3 หน่วยกิต

ประสิทธิภาพในการให้ข้อมูลย้อนกลับ(Feedback)แก่ผู้เรียนเป็นรายบุคคลในวิชาสนทนา
-การใช้บทสนทนาจากการถอดเทปสนทนาของผู้เรียนเอง-

SEKI Yuko

งานวิจัยฉบับนี้ มีเนื้อหาเกี่ยวกับ การให้ข้อมูลย้อนกลับ(Feedback)แก่ผู้เรียนเป็นรายบุคคล ในการฝึกหัดสนทนา ซึ่งเป็นส่วนหนึ่งของวิชาการอ่าน และการฟัง ของผู้เรียนภาษาญี่ปุ่นในระดับต้นตอนปลาย และระดับกลางตอนต้นที่ผู้เรียนรับผิดชอบ และมีเนื้อหาเกี่ยวกับความคิดเห็นของผู้เรียนต่อวิธีการให้ข้อมูลย้อนกลับ(Feedback)ดังกล่าว

ผู้เขียนได้ให้ผู้เรียนถอดเทปการสนทนาที่ตนเองได้ฝึกสนทนาทั้งในฐานะของผู้พูดและผู้ฟังเป็นตัวอักษร โดยมีวัตถุประสงค์เพื่อให้ผู้เรียนได้ตระหนักถึงปัญหาต่างๆ ของตนเองในการสนทนา เช่น ความผิดพลาดทางไวยากรณ์ ความมีประสิทธิภาพในการสื่อสารอย่างละเอียดและเป็นกลาง โดยผ่านการรับรู้ทางการมองเห็น และเพื่อให้ผู้เรียนสามารถแก้ไขปัญหาดังกล่าวเหล่านั้นให้ดีขึ้น นอกจากนี้ ผู้เขียนยังให้ข้อมูลย้อนกลับ(Feedback)แก่ผู้เรียนเป็นรายบุคคลโดยอ้างอิงบทสนทนาและบทสนทนาที่ผู้เรียนถอดเทปไว้อีกด้วย จากความคิดเห็นของผู้เรียนนั้น ผู้เรียนคิดว่าการถอดเทปบทสนทนาเป็นตัวอักษรนั้น ช่วยให้ผู้เรียนได้ตระหนักถึงจุดบกพร่อง และความผิดพลาดทางไวยากรณ์ ประกอบกับข้อมูลย้อนกลับ(Feedback)ต่างๆจากผู้สอน ช่วยให้ผู้เรียนได้ตระหนักถึงปัญหาที่ตนเองไม่เคยรู้ และได้มองเห็นวิธีการที่จะแก้ไขปัญหาดังกล่าวให้ดีขึ้น แต่ในทางตรงกันข้ามผู้เรียนรู้สึกไม่พึงพอใจในการถอดเทปเป็นตัวอักษรเนื่องจากมีความยุ่งยาก และต้องใช้เวลามาก

The project for the development of a Japanese language textbook
for high schools in Thailand

Bussaba banchongmanee

IMAEDA Aki

Prapa Sangthongsuk

The demand for a new Japanese textbook suited to actual conditions arose in the high schools in Thailand. This was due to the increase in the teaching of the Japanese language at the high school level and to the institution of a new curriculum by The Ministry of Education. The project for the development of a Japanese language textbook for high schools started in 2000 with the cooperation of the Ministry and The Japan Foundation. The project was carried out by a committee consisting of Japanese language teachers from Thai high schools, universities, and the Japan Foundation. The committee studied needs by making inquiries, designed a syllabus, wrote a textbook draft and evaluated it. After trial teaching in high schools, the final textbook was put on sale in 2004. In this report we will discuss the characteristics of the project and its result: the Japanese textbook *Akiko to Tomodachi*, and also the significance of this project in Thailand.

การศึกษาภาษาญี่ปุ่นด้านการฟังขั้นพื้นฐานของผู้เรียนชาวไทย
-สภาพการณ์ และประเด็นที่ควรศึกษาต่อไป-

สุกัญญา ทองดินอก

บทความนี้ผู้เขียนได้ศึกษาข้อมูลและงานวิจัยต่างๆ ที่เกี่ยวข้องกับการศึกษาภาษาญี่ปุ่นด้านการฟัง สภาพการณ์ การศึกษาภาษาญี่ปุ่นขั้นพื้นฐานในเมืองไทย เพื่อเป็นแนวทางในการปรับปรุงและพัฒนา การเรียนการสอนรวมถึงตำรา ภาษาญี่ปุ่นด้านการฟังขั้นพื้นฐาน

เนื้อหาของบทความแบ่งออกเป็นสามส่วน ส่วนแรกกล่าวถึงงานวิจัยที่เกี่ยวข้อง ส่วนที่สองกล่าวถึง สภาพการณ์ การเรียนการสอนภาษาญี่ปุ่นด้านการฟังในเมืองไทย โดยครอบคลุมไปถึงข้อจำกัดและปัญหาที่เกี่ยวข้อง ส่วนสุดท้าย กล่าวถึงประเด็นต่างๆ ที่ควรศึกษาต่อไป

Fluency and accuracy with communicative activities

Fujii Akiko

Although both fluency and accuracy are important for language teaching, it is not easy to keep a balance between them. When you decide to teach communication activities to students, especially Thai students, at first you introduce communication activities and you have to train students to teach them. Since students are not familiar to studying with the reasons for communication activities, students' participation is important. Then you consider fluency more than accuracy during the class.

Once the students are used to doing the activities, you should think about how to teach accuracy as well as fluency. It is useful for accuracy to develop communication activities which force students using specific structures, and to create engaging feedback tasks. And it is always important to know what your students are able to do when you plan what to teach.

กลยุทธ์การจัดการเรียนการสอนเพื่อเสริมสร้าง Cultural Literacy กับตำรา AKIKO TO TOMODACHI

Prapa Sangthongsuk

HATTA Naomi

Yabe(2001)กล่าวถึงจุดมุ่งหมายในการเรียนภาษาญี่ปุ่นในระดับประถมศึกษาจนถึงระดับมัธยมศึกษาในต่างประเทศว่าเป็นการศึกษาเพื่อพัฒนามนุษย์ให้เป็นมนุษย์ที่สมบูรณ์ โดยเสริมสร้างศักยภาพ ในการตั้งรับและปรับตัวให้เข้ากับวัฒนธรรมที่แตกต่างได้ และได้นำเสนอกลยุทธ์การจัดการเรียนการสอน เพื่อเสริมสร้าง Cultural Literacy บทความนี้ได้วิเคราะห์เนื้อหาของตำรา AKIKO TO TOMODACHI ซึ่งเป็นตำราที่เจแปนฟาวนด์ผลิตขึ้นสำหรับโรงเรียนมัธยมศึกษาว่าสามารถเสริมสร้าง Cultural Literacyตามที่Yabe(2001)กล่าวได้หรือไม่ นอกจากนี้ยังนำเสนอกลยุทธ์การเรียนการสอนทางด้านวัฒนธรรมเพื่อเสริมสร้าง Cultural Literacy ตามที่ Yabe(2001)ได้กล่าวไว้อีกด้วย

วิธีการประกอบสื่อการสอนที่มีเครื่องหมายAccentของภาษาญี่ปุ่นโดยใช้คอมพิวเตอร์ส่วนตัว

—โดยใช้T_EXซึ่งเป็นซอฟต์แวร์สำหรับการเรียงพิมพ์ —

MATSUBARA Jun

ในการทำสื่อการสอนที่มีเครื่องหมายAccent ของภาษาญี่ปุ่นโดยใช้คอมพิวเตอร์ส่วนตัว ผู้เขียนใช้ Microsoft Word ของบริษัท Microsoftมาจนถึงปัจจุบัน โดยใช้เครื่องมือAutoshape("รูปวาด") และใช้เมาส์ลากเส้นตรงลงบนตัวอักษร

แต่ว่า วิธีดังกล่าวนี้ มีปัญหาเช่น เส้นเอียงบ้าง จุดสัมผัสไม่พอดีกันบ้างและเส้นที่ขีดได้เคลื่อนที่ในระหว่างการทำงาน เป็นต้น นอกจากนี้แล้วการควบคุมเมาส์ในการขีดเส้นนี้ เป็นงานที่ละเอียดมาก ต้องใช้เวลา และต้องการสมาธิสูง

ผู้เขียนคิดว่า เพื่อที่จะแก้ไขปัญหาดังกล่าวนี้นี้ การเลือกใช้ T_EX ซึ่งเป็นซอฟต์แวร์สำหรับการเรียงพิมพ์เป็นวิธีที่ดีที่สุด แล้วจึงพิจารณาวิธีการ output เครื่องหมาย Accent ของภาษาญี่ปุ่นโดยใช้T_EX

บทความนี้จะแนะนำวิธีการ output เครื่องหมาย Accent ของภาษาญี่ปุ่นโดยใช้ T_EX และวิธีนำมาใช้กับคอมพิวเตอร์ส่วนตัว

การคัดเลือกบุคคลเข้าศึกษาในสถาบันอุดมศึกษา ปีการศึกษา 2547

กับ คณะ/สาขาวิชาที่กำหนดให้วิชาภาษาญี่ปุ่นเป็นวิชาสอบ

EBIHARA Tomoharu

บทความนี้ แสดงข้อมูลการสอบคัดเลือกบุคคลเข้าศึกษาในสถาบันอุดมศึกษา ของปี 2547 ดำเนินการโดยรัฐบาลไทย และแสดงข้อมูลการสอบเข้าโดยวิชาทั่วไป และการสอบเข้าโดยใช้วิชาภาษาญี่ปุ่น ในปี 2547 มีสถาบันอุดมศึกษาเข้าร่วมการสอบคัดเลือกนี้รวม 79 แห่ง มีสถาบันฯ ที่สามารถเลือกภาษาญี่ปุ่นในการสอบเข้า 19 แห่ง 87 คณะ/สาขาวิชา ซึ่งในจำนวนนี้มีเพียง 1 แห่ง 1 หลักสูตรเท่านั้นที่กำหนดวิชาภาษาญี่ปุ่นเป็นวิชาบังคับในการสอบคัดเลือก

สถาบันฯ ที่มีสาขาวิชาภาษาญี่ปุ่นที่เข้าร่วมการสอบคัดเลือก ปี 2547 มี 12 แห่ง 12 สาขาวิชา ในจำนวนนี้ สถาบันฯ ที่กำหนดให้ภาษาญี่ปุ่นเป็นวิชาที่ใช้ในการสอบคัดเลือกมี 10 แห่ง 10 สาขาวิชา ส่วนอีก 2 แห่งไม่ได้กำหนด และนอกจากนี้ ยังมีรายละเอียดที่น่าสนใจอีก 4 ข้อ คือ

1. ตารางแสดงรายชื่อสถาบันอุดมศึกษา คณะ สาขาวิชาภาษาญี่ปุ่น และสาขาอื่นๆ
วิชาที่ใช้ในการสอบคัดเลือกของคณะ/สาขาวิชาที่เลือกภาษาญี่ปุ่นเป็นวิชาสอบในปีการศึกษา 2547
2. จำนวนผู้สมัครคัดเลือกในปีการศึกษา 2547 ที่สอบได้คะแนนตามช่วง
3. จำนวนรับตามระเบียบการสอบคัดเลือก จำนวนผู้มีสิทธิ์สอบสัมภาษณ์ และจำนวนผู้มีสิทธิ์เข้าศึกษา ประจำปีการศึกษา 2547
4. จำนวนนิสิต /นักศึกษาชั้นปีที่ 1 ปีการศึกษา 2547 จำแนกประเภทรับผ่าน สกอ. และการสอบตรง

คุณประโยชน์ที่ได้รับจากการพักกับครอบครัวชาวญี่ปุ่นในประเทศไทย

- รายงานผลการสำรวจ 3 ฝ่าย (ผู้เรียน ผู้สอน และครอบครัวชาวญี่ปุ่น) -

FUKAZAWA Shinko

เมื่อเดือนกรกฎาคม ค.ศ.2003 นักศึกษาจากสถาบันราชภัฏนครศรีธรรมราช ซึ่งตั้งอยู่ทางภาคใต้ของประเทศไทยได้เดินทางไปพักกับครอบครัวชาวญี่ปุ่นซึ่งอาศัยอยู่ในกรุงเทพมหานคร Homestay Program เป็นกิจกรรมหนึ่งในการเรียนการสอนภาษาญี่ปุ่น ซึ่งมีผู้เกี่ยวข้องคือผู้เรียน ครอบครัวชาวญี่ปุ่น และอาจารย์ผู้สอน ที่ผ่านมายังไม่เคยมีการสำรวจความคิดเห็นจากผู้เกี่ยวข้องทั้ง 3 ฝ่ายนี้ จึงยังไม่เห็นถึงคุณประโยชน์ของกิจกรรมนี้ได้อย่างชัดเจน บทความนี้เป็นารายงานผลการสำรวจความคิดเห็นของผู้เกี่ยวข้องับกิจกรรมนี้ทั้ง 3 ฝ่ายว่ามีคุณประโยชน์อย่างไรบ้าง

ร่วมพินิจภาษาญี่ปุ่นที่ใช้ในวงธุรกิจ-จากมุมมองขององค์กรธุรกิจและสถาบันการศึกษา-
(รายงานผลสำรวจและการสัมภาษณ์ของกลุ่มศึกษาภาษาญี่ปุ่น)

Tanasarnsanee Mika, KOSAKA Chikako
TOYAMA Jun, NAKAI Masaya,
FUKAZAWA Shinko

บทความนี้เป็นรายงานสรุปผลสำรวจของกลุ่มศึกษาภาษาญี่ปุ่น อันสืบเนื่องมาจากข้อสงสัยในหมู่ครูผู้สอนภาษาญี่ปุ่นว่า “ภาษาญี่ปุ่นที่เล่าเรียนจากสถาบันสามารถนำไปใช้ได้จริงหลังจบการศึกษาหรือไม่” รวมทั้งสรุปผลการสัมมนาประจำปี (มีนาคม 2548) ที่จัดขึ้นเพื่อพูดคุยเกี่ยวกับหัวข้อและผลสำรวจดังกล่าว ประเทศไทยและญี่ปุ่นมีความสัมพันธ์ทางเศรษฐกิจที่แน่นแฟ้นมาช้านาน ทำให้องค์กรธุรกิจของญี่ปุ่นเข้ามาลงทุนในไทยเป็นจำนวนมาก ภาษาญี่ปุ่นจึงมีบทบาทอย่างยิ่งในการทำงาน คำถามที่ตามมาก็คือ การทำงานดังกล่าวต้องการความสามารถทางภาษาญี่ปุ่นในระดับใด และการศึกษาภาษาญี่ปุ่นที่เป็นอยู่สามารถตอบสนองความต้องการนั้นได้มากน้อยเพียงใด กลุ่มทำงานได้สำรวจเกี่ยวกับภาษาญี่ปุ่นที่ใช้จริงในการทำงานจากการพูดคุยกับองค์กรทางธุรกิจ และผู้ที่เคยศึกษาภาษาญี่ปุ่นจากมหาวิทยาลัยในประเทศไทยและกำลังปฏิบัติงานที่ใช้ภาษาญี่ปุ่นอยู่ รวมทั้งสำรวจการเรียนการสอนภาษาญี่ปุ่นในมหาวิทยาลัยว่า ตอบสนองความต้องการเหล่านั้นได้มากน้อยเพียงใด เพื่อเป็นแนวทางในการปรับปรุงการสอนภาษาญี่ปุ่นต่อไปในอนาคต ผลสำรวจทำให้ทราบว่า การพัฒนาความสามารถทางภาษาญี่ปุ่น จะอาศัยเพียงตัวองค์ความรู้อย่างเดียวมันไม่เพียงพอ สิ่งสำคัญคือ ในชั่วโมงเรียน ควรจำลองสถานการณ์ต่างๆ เพื่อให้ผู้เรียนรู้สึกเหมือนได้ประสบการณ์จริงด้วย นอกจากนี้ ในการทำงาน ยังต้องตระหนักถึงความแตกต่างทางวัฒนธรรม และปลูกฝังความสามารถในการเสริมสร้างความเข้าใจข้อแตกต่างนั้นร่วมกันอีกด้วย